

現代リユースビジネスの成長戦略

失敗しないための「構築」と「購入」の先にある第3の選択肢

GMOメイクショップ株式会社



目次

リユース事業者向けDX成功ガイドの全体像

本資料では、リユース事業者が直面する特有の課題に対し、DX投資の「2つの罠」を回避し成功に至る「第3の選択肢」を解説します。4つの先進的な実装事例を通じて、具体的なDX推進方法と成果をご紹介します。

1

第1章 リユース業界のデジタル分岐点

2

第2章 DX投資の「2つの罠」

3

第3章 第3の選択肢：ハイブリッド・シンセシス

4

第4章 実装事例

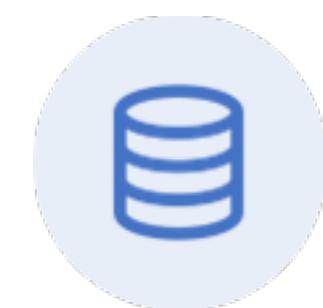
5

第5章 解決策と次のステップ

第1章 | リユース業界のデジタル分岐点

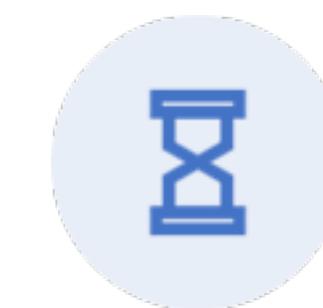
DXのパラドックス：必要性は明白なのに、なぜ進まないのか

市場は拡大し競争は激化。一方で現場は依然としてExcel・メール・FAXに依存し、集計・転記・承認といった手作業がボトルネックとなっています。必要性を認識しているにも関わらずDXが進まない。多くの企業が、「3つの現象」に直面しています。



情報のサイロ化

Excel/メール/FAXに情報が点在し、全体像が見えない。



手作業のボトルネック

集計・転記・承認に工数がかかり、ミス・遅延が発生。



リアルタイム性の欠如

在庫状況や顧客情報が即座に反映されず、機会損失を招く。

なぜ、これらの問題は解決されないのでしょうか？それは、リユース業界が「標準小売」とは根本的に異なる、「4つの特有障壁」を抱えているからです。次のスライドで、DXを阻むその構造的な要因を解説します。

第1章 | リユースDXを阻む4つの特有障壁

DXのパラドックス：標準小売と異なる構造が生む遅延要因

リユース事業者が成長過程で直面する共通課題は、実店舗とオンラインの連携、商品の信頼性、顧客体験の向上など多岐にわたります。これらの課題はリユース特有の複雑な構造によって生み出されており、解決しないまま放置すると、販売機会の損失や業務非効率につながります。

1

「一点物」在庫管理の複雑性

One-to-One個体管理（SKU・真贋・状態・写真・価格）を前提にしないECでは運用が破綻しやすい。

2

属人化したアナログ業務

査定・鑑定が匠の経験に依存し標準化が難しい。スケールせず、デジタル化への抵抗も生じる。

3

分断されたオムニチャネル在庫

店舗分散在庫で二重販売リスクやShip-from-Storeが発生。リアルタイム引当・可視化が必須。

4

ROI不確実性と二者択一

安価SaaS（機能不全）かフルスクラッチ（過剰投資）の両極で意思決定が停止しがち。

これらの課題は個別最適化ではなく、供給（買取）から販売（多チャネル）までを一貫で連携させ、リユース特有の個体管理と複数チャネル展開を同時に解決するDXアプローチが求められます。

第2章 | フルスクラッチ開発の落とし穴

「遅い・高い・止まりやすい」の三重苦。真のコストは構築後に継続する保守・運用

「自社に完璧に合うシステムを」という理想から始まるフルスクラッチ開発。

しかし、その多くが決裁者の頭を悩ませる「遅い・高い・止まりやすい」の三重苦に陥ります。真のコストが「構築後」に技術的負債として永続的に発生し続けるからです。

1

開発が遅い

仕様確定～実装～検証で市場投入が遅延し、ビジネスチャンスを逃す機会損失が発生

2

コストが高い

初期投資と保守負担が大きく、総保有コスト（TCO）が想定以上に膨張

3

止まりやすい

要件変更に追従しづらく、リリース後の拡張で硬直化しメンテナンス負荷増大



重要ポイント：本当のコストは「構築後」に発生し続ける

日々の保守・運用（脆弱性対応、決済アップデート、法改正対応、性能チューニング、障害対応）が恒常に発生し、担当者の属人化や技術的負債として累積します。

第2章 | 拡張性のないSaaS/ASPの限界

「API連携やカスタマイズができないシステム」を選んでしまうと、成長段階で必ず行き詰まる

一見コスト効率は良好でも、リユース固有の要件に合致せず、成長段階で運用破綻やDX後退を招くケースが少なくありません。

1 リユース特有要件に非対応

個体管理／状態・グレード表示／真贋情報／付属品管理などが標準機能にない

2 多店舗・FCの複雑性に不適合

分散在庫・店舗出荷・BtoB受発注・買取査定の一元連携が困難

3 追加開発・外部連携の制約

カスタマイズ自由度が低く、要件変更やスケールに合わせた拡張が難しい

4 現場がアナログ逆戻り

Excel・メール・FAXに回帰し、二重登録・人的ミスを誘発



結果：安さを優先した結果の「機能不全の安価な選択」は、DX投資の効果を相殺し、運用負荷と機会損失を増大させます。

第2章 | 戰略的DX投資の比較

3つのアプローチを4つの評価軸で比較し、「戦略的バランス」を見極める

リユースEC構築における主な選択肢を比較します。コスト・スピード・拡張性・運用負荷の観点から、自社の成長フェーズや独自要件に最適なアプローチを選択することが重要です。

観点	フルスクラッチ開発	GMOクラウドEC (SaaS+カスタマイズ)	基本的なSaaS/ASP
拡張性	◎ add-on・外部連携で柔軟	◎ add-on・外部連携で柔軟	△ 制限あり
開発速度	△ 仕様確定～実装まで長期間	◎ 短期導入+段階的拡張	◎ 短期導入
TCO	△ 初期投資大・保守コスト高	○ 必要十分な投資で最適化	◎ 初期投資小・標準機能のみ
運用負荷	△ 保守・障害対応に人員必要	○ コア機能はSaaS・差別化部分だけ運用	△ カスタマイズ性に制限

各アプローチの強みと弱みは、事業フェーズや独自要件の有無によって異なります。

自社のリユース特有の要件と、将来の拡張性を踏まえて、どの選択肢が「戦略的バランス」として最適かを見極めることがDX成功の鍵となります。

第2章 | 企業の「成長フェーズ」に合わせた最適なシステムの選び方

立ち上げから市場制覇まで。「事業の壁」を乗り越えるための3つの戦略的アプローチ。

事業フェーズによって、システムに求められる役割は変化します。初期は「スピード」、成長期は「独自性」、成熟期は「安定性と大量処理」。自社の現在地と将来像を照らし合わせ、最適なアプローチを確認しましょう。

フェーズ	①立ち上げ・検証期	②成長・独自化期	③成熟・市場制覇期
推奨システム	高機能SaaS (makeshopなど)	SaaS + API連携 (SaaSをベースに一部拡張)	ハイブリッドクラウド (GMOクラウドEC)
特徴	スピードと安さを優先。 標準機能で運用を合わせる。	「SaaSの良さ」を残しつつ、 ボトルネック部分だけ外部 ツールとAPI連携。	コア業務自体を独自構築。 大規模トラフィックや特殊な商 習慣に完全対応。
選定の鍵	「安さ」ではなく「データ資産を 引き継げるか」で選ぶ	「開発なしでつなげて解決」 できるか	ベンダーに「技術的負債」をオ フロードできるか

重要なのは「最初から高額なシステムを入れること」ではなく、「事業成長に合わせて、システムを止めずに拡張・移行できるプラットフォームを選ぶこと」です。GMOクラウドECグループなら、SaaS (makeshop) から独自構築 (クラウドEC) まで、シームレスな移行・連携が可能です。

第3章 | ハイブリッド・シンセシス：SaaS×スクラッチ 「いいとこ取り」のGMOクラウドECで、最新性・安全性・拡張性・負荷耐性を両立

コアはクラウドのSaaSで安定運用しつつ、差別化が必要な領域はアドオン開発や外部システム連携で拡張する。これは「妥協」ではなく、ビジネス目的に対する戦略的バランスを実現する設計思想です。



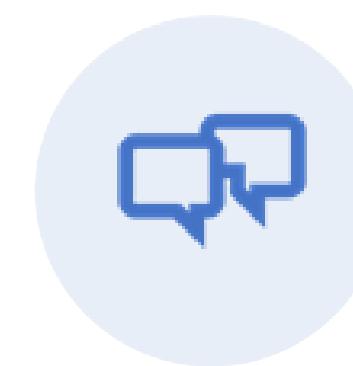
SaaSの利点を継承

ベンダー運用で最新性と安全性を確保、保守負荷を低減



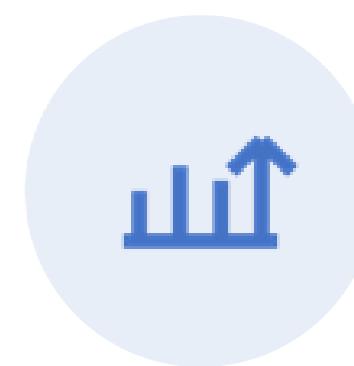
スクラッチの利点継承

アーキ設計で拡張性と負荷耐性を担保し、業務固有要件に適合



融合メカニズム

アドオン+API連携で部分最適を積み上げ、PoC→段階拡張でリスクを制御



経営インパクト

投入スピードとTCOを最適化。二者択一の罠を脱し、実装と運用の両立へ

結論：クラウドECのハイブリッド・シンセシスは、SaaSの運用優位とスクラッチの適合力を戦略的に合成し、リユース特有の要件に最短距離で応える方法です。

第3章 | クラウドECで課題解決（アーキテクチャ詳細）

最新性×安全性と拡張性×負荷耐性を両立する「ハイブリッド」設計

コアはクラウドサービスとして提供し最新性・安全性を継承。加えて、高いカスタマイズ性を前提に設計し拡張性・負荷耐性を確保。アドオン開発と外部システム連携で、リユース特有の要件に段階的に適合させます。



1 コア=クラウド提供

ベンダー運用で常に最新・安全。標準EC機能を安定稼働

2 設計=高カスタマイズ

個体管理や査定ロジックなど業務固有要件を拡張可能

3 連携=Add-on／外部API

POS在庫・買取査定・会員アプリ・BtoB・オークション等を柔軟に接続

第4章 | 実装事例①：株式会社フルアヘッド様（フェーズ②）

アナログな買取フローをAPI連携（kintone + EC）でDX化

EC（makeshop）と業務アプリ（kintone）をAPI連携させ、リユース事業の根幹である「買取プロセス」全体をデジタル化した事例です。

導入前の課題

- **買取業務のアナログ運用**：商品到着から査定、顧客確認、入金までの全工程が手作業で行われており、ミスが多く発し事務遅延による機会損失が発生していた。
- **ステータスの不透明性**：買取プロセスがブラックボックス化し、顧客・店舗ともに進捗確認のための電話/メール連絡に大きなコストがかかっていた。
- **買取価格表の手動更新**：2万6千点を超える商品の買取価格表を、ECの販売マスタとは別に、HTMLを手作業で更新しており、二度手間と更新ミス（価格の不一致）の温床となっていた。

システム導入による解決策

- **kintone + ECのAPI連携**：既存ECと業務アプリ基盤をAPIで連携し、買取フロー全体をデジタル化。
- **買取プロセスのシステム化**：顧客がWebフォームから申し込みと「買取ID」が自動発行され、顧客専用の「マイページ」が自動生成。進捗がリアルタイムで可視化される仕組みを構築。
- **買取価格表の自動同期**：ECの商品マスタ（makeshopの未使用カラム）に「買取金額」を保持。そのデータをAPIで自動的に読み出し、買取表ページに自動反映させることで、マスタ更新の二度手間を撤廃。

実装事例①：株式会社フルアヘッド様

API連携による「買取フローDX」と「価格表自動同期」の実現

1

買取ステータスの一元管理

「申込」から「入庫」までの全ステータスをkintoneで一元管理。顧客はマイページで、店舗は管理画面でリアルタイムに進捗を把握可能にし確認の往復連絡を撲滅。

2

ECマスタを「単一の真実」に

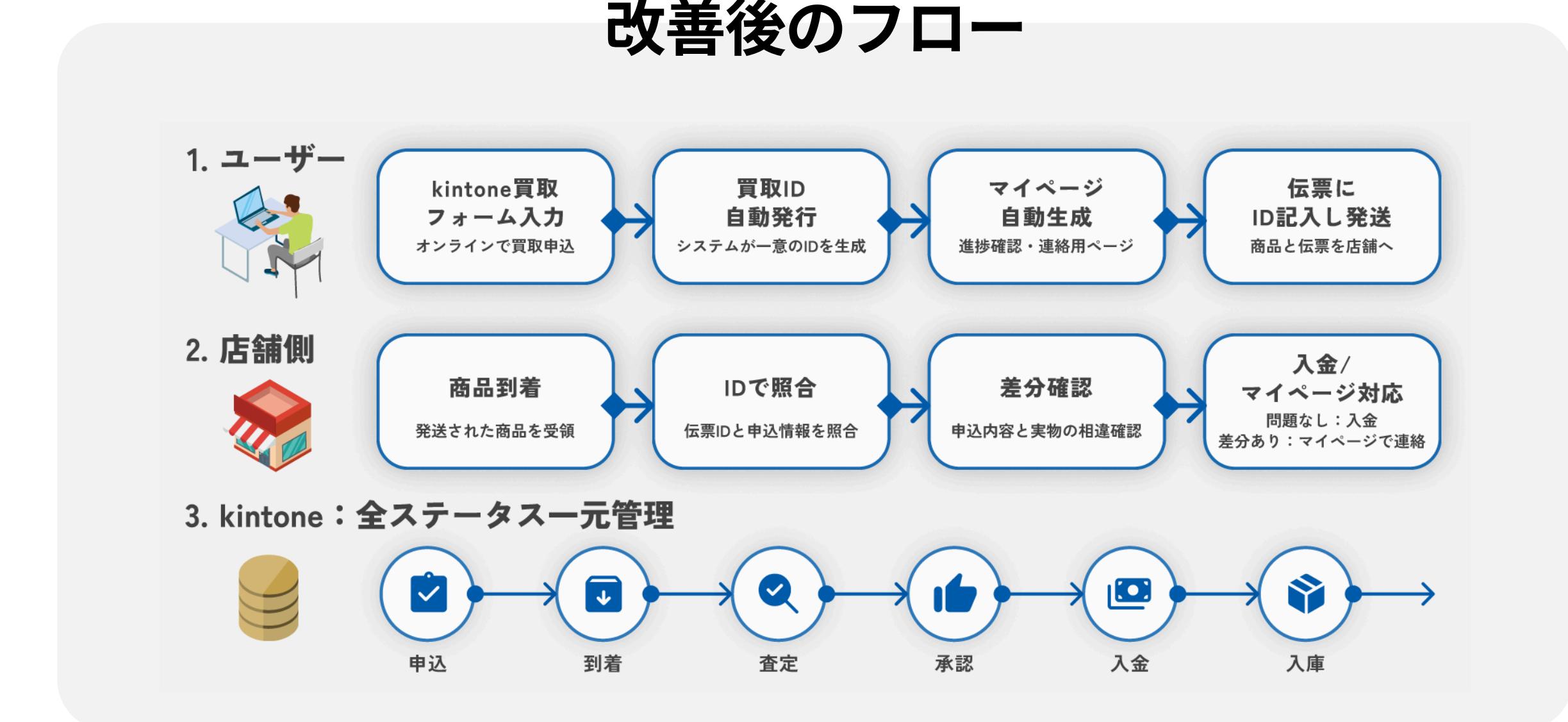
ECの商品マスタをCSVで更新するだけで、Webサイトの販売価格・買取価格が同時に自動更新される仕組みを構築。マスタの二重管理と更新ミスを根本から解決。

3

「開発しない」DXアプローチ

フルスクラッチ開発を避け、SaaSと業務アプリという既存のサービスをAPI連携させることでコストを抑制しつつ迅速に必要な機能を実装。

改善後のフロー



“

電話/メールでの往復連絡が大幅に削減され、買取ステータスが全件可視化されたことで対応漏れがゼロに。
現金化までのスピードが向上したことで顧客満足度が上がり、「現金化↑ → 買取数↑ → 品揃え↑」というビジネスの好循環が生まれた。

第4章 | 実装事例②：ブックオフコーポレーション株式会社様（フェーズ②）

800店舗のアナログ受発注を、ECシステムの応用でDX化

フランチャイズ展開する大手リユース企業が直面していた受発注管理の課題を、ECプラットフォームの新たな活用方法で解決した事例です。

導入前の課題

- **アナログ業務の分散**：全国800店舗からの発注が、Excel、メール、FAXなどバラバラな手段で行われていた。
- **本部の高負荷な手作業**：各店舗から届くアナログな発注書を、本部担当者が手作業で集計していた。
- **二重登録によるミス**：集計したデータを、さらに手作業で基幹システムへ二重登録しており、ミスや遅延の原因となっていた。

システム導入による解決策

- **BtoB受発注基盤の導入**：ECシステム「受発注Lite」を、店舗-本部間のBtoB受発注基盤として導入。
- **発注プロセスのWeb化**：本部がWeb上に発注対象の商品を登録し、全店舗がWebブラウザから発注できる仕組みを構築。
- **集計・確認プロセスの自動化**：各店舗からの注文データを自動で集計し、本部での確認・サプライヤへの発注プロセスを大幅に効率化

実装事例②：ブックオフコーポレーション株式会社様 ECシステム（受発注Lite）のアーキテクチャ転用による業務フロー改善

1 ECシステムのBtoB転用

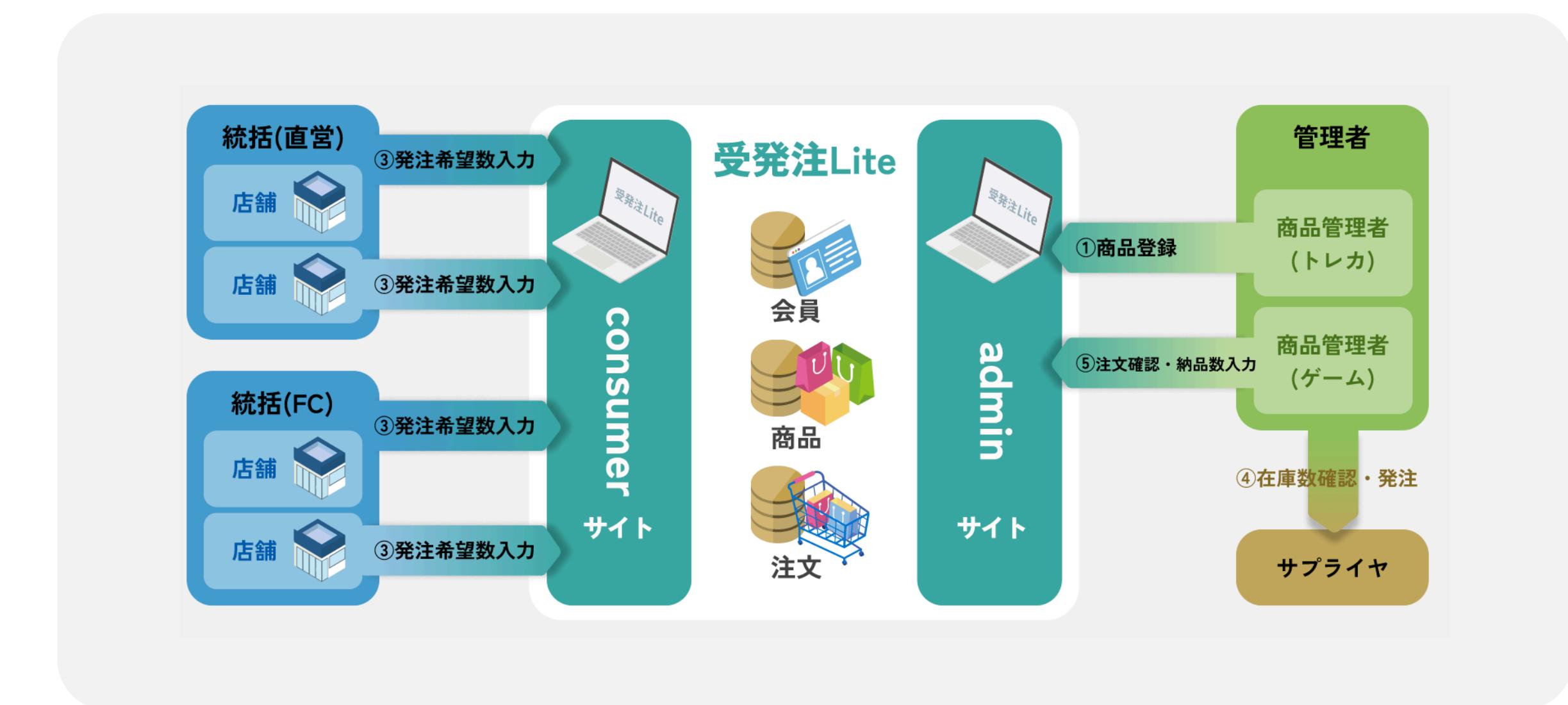
一般的なBtoCのECサイトの仕組み（商品登録・カート・注文管理）を、800店舗のBtoB受発注業務に再利用することで、フルスクラッチ開発に比べてコストと開発期間を大幅に圧縮。

2 アナログ業務の完全撤廃

店舗側の発注手段をWebに統一し、本部側の集計・二重登録といった手作業を撤廃。

3 業務プロセスの自動化・可視化

本部担当者が行う作業は「商品登録」と「注文確認・納品数入力」のみとなり、店舗からの発注状況がリアルタイムで可視化された。



”

800店舗が関わるアナログな受発注管理によって発生していた集計ミスや、基幹システムへの二重登録にかかる工数を大幅に削減。店舗の発注状況がリアルタイムで可視化され、本部の発注業務が迅速化・正確化。

第4章 | 実装事例③：JR九州商事株式会社様（フェーズ②） ミニマムスタート（PoC）によるアジャイルな新規事業開発

既存の物販ECサイトを基盤にしつつ、フルスクラッチ開発を選ぶのではなく、オークション機能をアドオンすることで「ミニマムスタート」を実現した事例です。

導入前の課題

- **リアルオークションの制約**：鉄道廃品などの希少品は、従来のリアルオークションで販売しており、開催場所・時間・人員に大きなコストがかかっていた。
- **商圈の限定**：リアル開催では参加者が限られ、「収集鉄」と呼ばれる全国の潜在顧客にリーチできていなかった。
- **開発のジレンマ**：オンライン化したいが、オークションという特殊な販売方法のため、既存の物販ECサイトとは別に大規模な開発が必要だと考えられていた。

システム導入による解決策

- **既存ECへのアドオン**：既に運用していたECサイト（makeshop）を基盤とし、オークション機能を追加開発（アドオン）するアプローチを採用。
- **アジャイルな開発**：大規模なフルスクラッチ開発を避け、「まずは小さく始めて検証する」というアジャイルなアプローチで、低コスト・短期間でのオンラインオークション立ち上げを実現。
- **ファンマーケティングのDX化**：オンライン化により全国の「収集鉄」が参加可能となり、希少品の価値を最大化する新たな収益チャネルを確立。

実装事例③：JR九州商事株式会社様

既存EC基盤+オークション機能アドオンによるアジャイル開発

1 オークションモジュールの活用

標準化された「ネットオークション（ヤフオク方式）」や「自動延長・自動締切」の機能を活用。これにより、信頼性の高いオークションシステムを迅速に構築。

2 ミニマムスタート（PoC）の実践

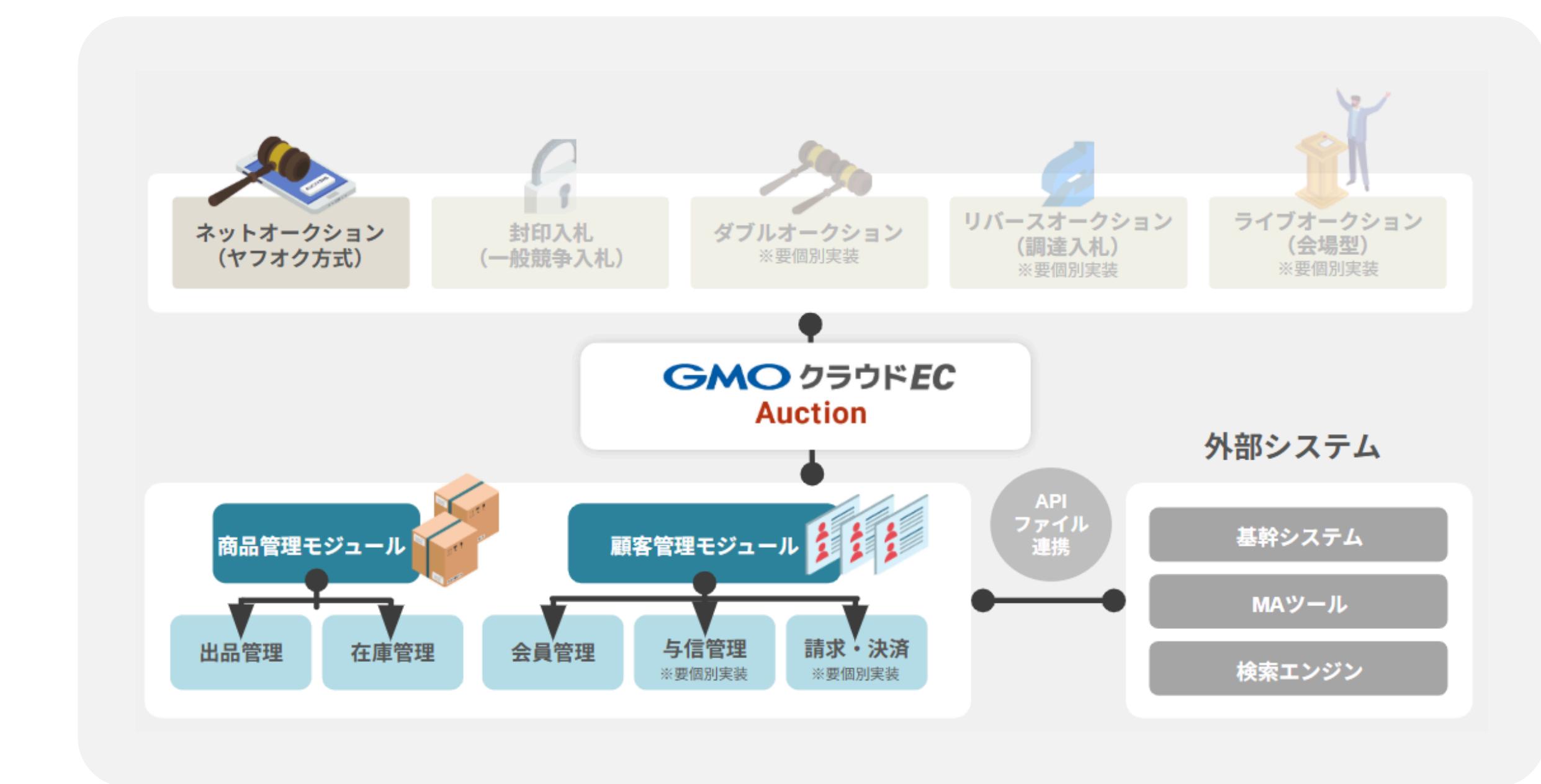
セミナー資料P48で示されているように、まずは「小さく始める（PoC）」ことでリスクを最小化。リアルオークションをオンラインに移行可能かを低成本で検証し、その後の本格スタートに繋げた。

3 「SaaS活用アプローチ」の優位性

フルスクラッチ開発（「全部作る」）の「遅い・高い・止まる」リスクを回避。「SaaS土台+必要最小のカスタマイズ」というアプローチ（セミナー資料P49）で、コストとスピードの最適化を実現。

“

フルスクラッチ開発に比べて圧倒的に低成本・短期間で、鉄道ファン向けのオンラインオークションという新たな事業をスタートできた。これにより、従来はリーチできなかった全国の顧客層を獲得し、ファンマーケティングのDX化と新たな収益源の確立に成功。



第4章 | 実装事例④：株式会社ゲオホールディングス様（フェーズ③） グローバルBtoBと複雑な入札要件を「ハイブリッド」に実装

世界的に拡大する中古モバイル市場に対し、リユース品のBtoB取引に特化したオークションサイトを構築し、新たな収益チャネルを開拓した事例です。

導入前の課題

- 市場の不透明性**：海外の中古モバイル市場は拡大している一方、「海外でいくらで売れるか分からず」という価格の不透明性が課題だった。
- リユース品の信頼性**：海外バイヤーに対し、現物を見せずに「グレード」や「品質」といったリユース品の状態をどう伝え、信頼を得るかが課題だった。
- BtoB特有の取引要件**：BtoCと異なり、卸販売（例：100個中20個だけ入札）や、商品状態（例：ジャンク品）に合わせた柔軟な入札方式が必要だった。

システム導入による解決策

- BtoBオークションサイト構築**：海外向けの卸販売を行うBtoBオークションサイトを新規構築。
- 信頼性の可視化**：リユース品特有の「グレード提示」や「品質の安心を訴求するコンテンツ」を実装。
- 複数の入札方式の実装**：
 - 封印式の数量設定入札：大量ロットのBtoB取引に対応（例：20個から入札可能）。
 - せり上がり入札：ジャンク品など、市場価格が読みにくい商品に適用。

実装事例④：株式会社ゲオホールディングス様

複数の入札方式（封印式・せり上がり）と品質可視化で、BtoB取引の信頼を構築

1

複雑なBtoB入札ロジックの実装

「封印式（数量設定可）」と「せり上がり式」という複数の入札方式を商品特性（ジャンク品など）に応じて使い分け、BtoB特有の取引ニーズに対応。

2

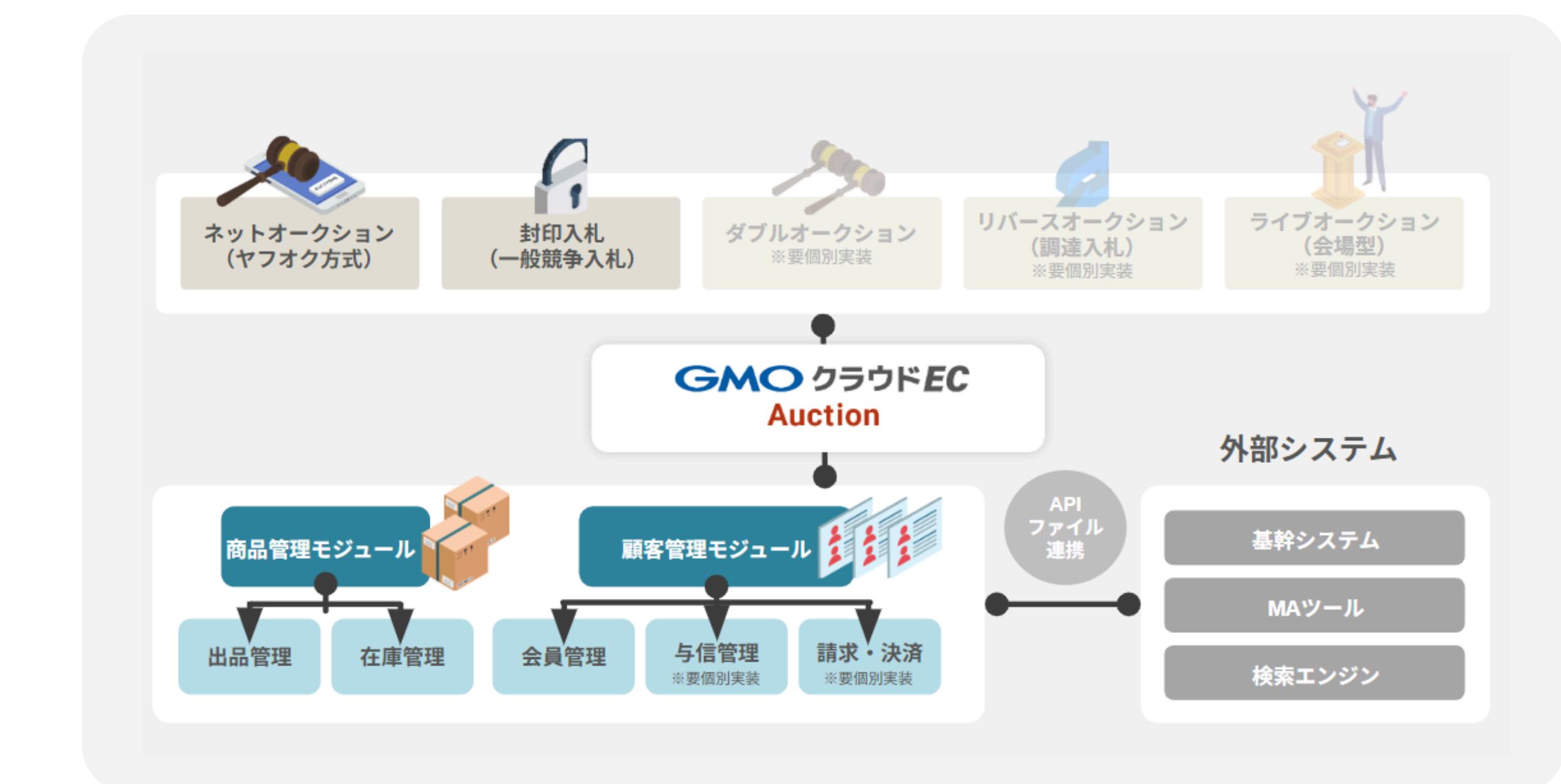
リユース品の信頼性担保（品質訴求）

「グレード」や「品質状態」を詳細に提示するコンテンツを実装し、海外バイヤーが安心して入札できる基盤を構築。

3

市場価格の最適化

「いくらで売れるか不明」という市場の不透明性に対し、オークション形式（特に「せり上がり」）を採用することで、市場原理に基づいた「最適価格」での取引を実現。



“

海外の中古モバイル市場という不透明なマーケットに対し、「市場への喚起」を行うと同時に、オークションによる「最適価格の提供」を実現しました。グレード提示と柔軟な入札方式により、海外バイヤーからの信頼を獲得し、新たな収益チャネルの確立に成功。

第5章 | リユース特化機能で課題を直接解決

リユースEC特有の課題に対応する5つの専門機能

1

在庫連携

POSシステムとリアルタイムに在庫連携し、店舗とECでの同時出品を実現。オンラインでどの店舗に在庫があるかを表示し、取り置き予約機能で実物確認購入をサポート。

2

商品信頼性向上

自由に登録可能なカスタム項目で、商品の状態、高級品の真贋情報、電子機器の動作確認結果や付属品有無などを詳細表示。検索オプションと連動し絞り込みも可能。

3

店舗受け取り促進

会員アプリと連携したクーポン発行で実店舗への来店を促進。店舗受け取り機能により配送コスト削減と来店時の追加購入による客単価向上を同時実現。

4

最適化されたUI/UX

多品種・個体管理に対応する探しやすい導線設計と詳細な検索カスタマイズ。購入プロセスのシンプル化と多様な決済方法対応。高品質画像と詳細説明で購入意欲促進。

5

オンライン査定・買取

オンラインでの事前見積もりと来店予約の連携で、店舗での待ち時間を短縮。査定のスムーズ化により顧客満足度向上と買取数増加を両立。

リユース業特有の課題に対応した機能を必要な組み合わせで柔軟に実装できるため、初期投資を抑えながら段階的に機能を拡張し、事業成長に合わせたDX推進が可能です。

第5章 | 自己評価チェックリスト

リユース特化機能の導入状況を確認

自社のDX状況を5つの重要機能で評価してみましょう。
「既に実装・運用できている」と思う項目にチェックを入れてください。

- 在庫連携: POSとEC連携・取り置き予約
- 商品情報の拡充: 商品情報の拡充と検索連動
- 店舗連動: 店舗受け取りと会員施策の連動
- フロントUX: 導線・検索・決済の最適化
- オンライン買取: オンライン査定・買取予約



チェックが3つ未満（0～2個）の場合は、リユースDX無料相談をご活用ください。
具体的な導入計画と優先順位付けをご提案いたします。

次のステップ チェックリストで見えた課題を、「実現可能なDX計画」へ

チェックリストで「チェックが3つ未満」だった場合、リユース特有の課題がまだ多く残されているかもしれません。次のステップとして、その課題を具体的な「実現計画」に落とし込みませんか？専門家が貴社の要件整理から実装計画の策定までを伴走支援します。

リユースDX 無料相談会（毎月5社様限定）

貴社のDX課題に、最適な構築プランを共に考えます。

- ✓ 課題の深掘りと要件整理（無料）
- ✓ 構築ロードマップの策定
- ✓ 最適なアーキテクチャ提案
- ✓ 概算スケジュールとコスト感の共有

まずはお気軽にご相談ください

- 所要時間：60分
- 実施方法：オンライン
- 参加費用：完全無料
- 無料相談予約：<https://x.gd/0JKcB>
- 03-6705-8605（平日9:00-18:00）
- marketing-div@makeshop.co.jp
- <https://www.cloudec.jp/>



スマートフォンで読み取り、
予約ください